（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第49輯

福瀬遺跡 Ⅱ

主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う
発掘調査報告書

1990.3

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第49輯

福瀬遺跡 Ⅱ

主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う

発掘調査報告書

1990．3

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

序　文

和泉市福瀬町に所在する福瀬遺跡は，昭和48年の大阪文化財センターによる分布調査で発見されたものですが，関西新空港建設関連のアクセスとして重要な大阪外環状線の建設工事に先だって発掘調査を実施するところとなりました。

調査は大阪府教育委員会の指導のもと，昭和62年から63年にかけて（財）大阪府埋蔵文化財協会が道路予定地約12000㎡にわたって実施してきたものです。

本書は，前回の調査時に未調査となっていた部分の調査報告であり，これによって福瀬遺跡のほぼ全容が明かとなり，ひとまず調査は一段落いたしました。

福瀬遺跡は，和泉市の山間部に位置しておりますが，縄文～古墳時代，奈良～江戸時代にまたがる複合遺跡であることが明かとなり，特に平安時代から中世にかけての濃密な遺構の分布が，当地の開発の歴史を物語っています。さらに，前回の調査で検出された「堀」と「土塁」をめぐらせた「居館」は，横山谷に蓄居していた池辺氏，父鬼氏，横山氏の在地豪族の内，横山氏（後の岡氏）の居館であったと推定されており，当地の開発の歴史や在地集団の動向を知るうえで貴重な成果が明かとなってきたと言えます。

本調査を実施するにあたっては，大阪府教育委員会，大阪府土木部鳳土木事務所，地元和泉市教育委員会，地元自治会など関係各位の多大な御協力と御理解を得，調査の円滑な実施ができましたことを深く感謝いたします。

今後とも当協会の事業に対して，ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成２年３月

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会
理事長　仁賀奈　祐　吉

例　　言

1．本書は主要地方道枚方，富田林，泉佐野線（一般国道170 号－通称大阪外環状線）建設に先立つ，和泉市福瀬町に所在する福瀬遺跡の第４次発掘調査報告書である。

2．調査は大阪府鳳土木事務所の委託を受けて，大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと，（財）大阪府埋蔵文化協会が実施した。

3．調査には当協会調査課第１班（班長森村健一）があたり，技師・岸本道昭が実務を担当した。現地調査は1989年12月に実施し，整理および報告書作成は1990年１月に完了した。

4．調査に当たっては大阪府鳳土木事務所，地元自治会など関係各機関の協力を受けた。

5．調査方法は，当協会発掘調査規程に従って地区割りを設定し，方位は座標北，標高はＴ．Ｐ．で表示した。平面図は航空測量を実施しており，図中の座標値の単位は㎞である。また，土壌色は小川正忠・竹原秀男編著「新版標準土色帖」（８版）1988年を使用して命名した。

6．本書の写真は遺構を調査担当者，遺物は小倉　勝があたった。

7．遺物は通し番号を与え，図・写真に共通する。

8．本調査は，本文中にも触れるように第１～３次調査の最後に残った小範囲の調査であった。先の調査結果については，当協会調査報告書 第39輯「福瀬遺跡」1989年，に詳細が述べ尽くされている。本書ではそれらについては割愛し，前書を参照されたい。また，本書第１～３図は前書所載のものに作成者の許可を得た上，一部変更を加えて再掲載したものである。

9．本書の執筆・編集は岸本が行なった。

目　　次

序文
例言
第Ⅰ章　はじめに……1
第Ⅱ章　調査の結果……5
　第１節　層序……5
　第２節　遺構と遺物……6
第Ⅲ章　まとめ……9

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置と調査区地区割……2
第２図　調査区位置図……3
第３図　既往の調査区との位置関係……4
第４図　調査区南壁（一部）土層断面図……5
第５図　調査区平面図……6
第６図　70－ＯＯ平面・断面図……7
第７図　76－ＯＸ断面図……7
第８図　出土遺物実測図……8

図　版　目　次

図版１　調査区垂直写真
図版２　調査区全景
図版３　土層と遺構
図版４　遺構
図版５　遺物

第Ⅰ章　はじめに

福瀬遺跡の発掘調査は1986年度の試掘調査に始まり，1987年から1988年にかけて３次の発掘調査が行なわれ，道路予定地内とは言え多くの考古学的事実が判明している。それらについては，既刊の当協会の報告書に詳しく，地理的・歴史的環境および調査全般の成果についてもそちらに譲ることとする。また，調査の方法や基本的な遺構・遺物の状況も既往の成果を出るものではなく，本書は事実報告にとどめたので既刊報告書との参照を重ねてお願いしておきたい。４次にわたる調査は，以下のとおりである。

１次調査　1987年７月～1988年１月
２次調査　1987年11月～1988年３月　「福瀬遺跡」協会調査報告書　第39輯
３次調査　1988年５月～1988年11月
４次調査　1989年12月　「福瀬遺跡Ⅱ」本報告書

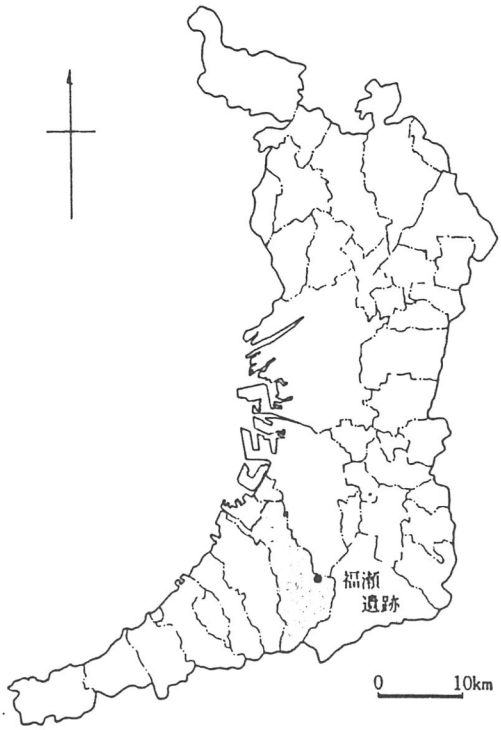
本調査区は，先立つ調査の過程で地元調整の不備から，約300㎡余りが未調整区となっていたものであり，Ｇ地区とＨ地区の間に残っていた台形状の調査区である。

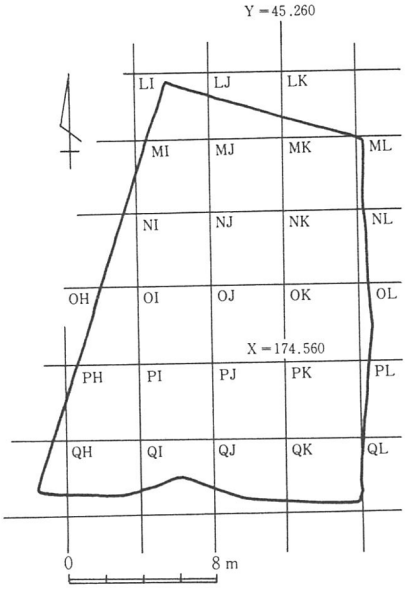
調査にあたっては，遺構面の深さや様子などがほぼ判明していたので，まず調査区の範囲を確定することから始めた。コンクリートやアスファルトによる地表面の改変があったが，国土座標値からの復原と試し掘りをもとにして位置関係を求めた結果，前回調査区のＧ，Ｈ両地区の端辺を確認し，前回調査区の側溝に本調査の側溝を重ねるようにして未調査部分が残らないように努めた。

なお，調査区域には排水管，コンクリートの建物基礎や性格不明な撹乱坑が散在し，まだ使用中の電柱が撤去できないまま残っている，などの状況であった。

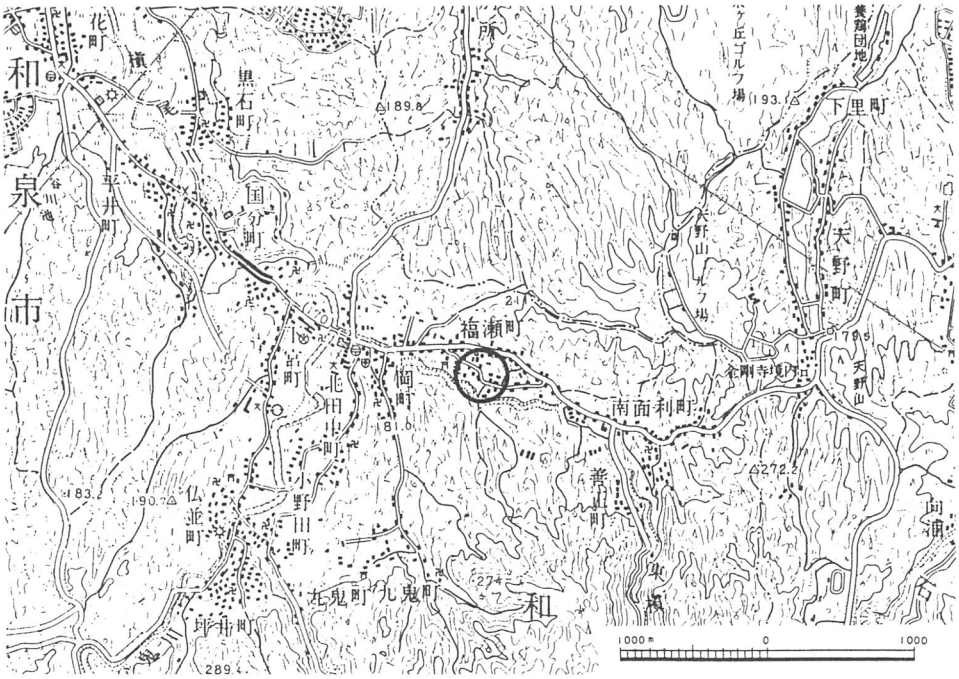
遺跡は，調査区西隣のＨ地区では鎌倉時代の溝と「居館」が検出されているが，東端付近は若干の撹乱を除いてほとんど遺構が希薄な区域である。東隣のＧ地区では，畑の鋤溝や不整形な落ち込みと土坑が多く認められるが，性格の明瞭な遺構が存在していない。したがって本調査区において，重要遺構の検出は当初から予想されていなかった。

調査の結果は予想どおりで，東西と南北方向の畑の鋤溝遺構が数十と，畑に関係すると思われる溝状のくぼみ，土坑が一基，南北方向に延びる浅い落ち込みが検出されたのみであった。遺物は総計500点余りが検出されたが，ほとんどは実測不可能な小片である。



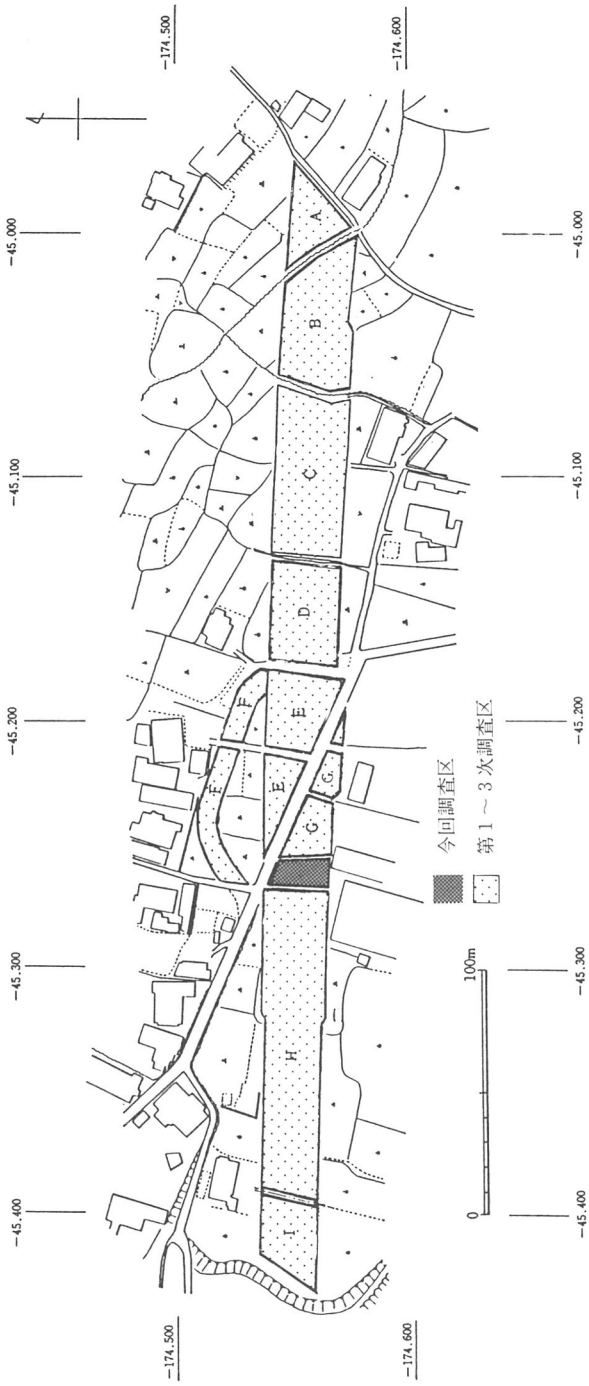


調査区地区割、４ｍ区画名称



第１図　遺跡の位置と調査区地区割

第２図　調査区位置図



第３図　既住の調査区との位置関係

第II章　調査の結果

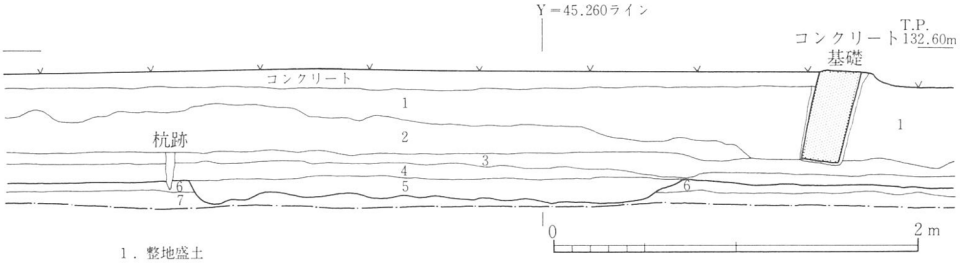
第１節　層序（第４図，図版３）

層序は第４図に示すように，単純である。調査区付近の地表はT.P.132.30mであって，遺構面は地表下50～60㎝に存在する。本調査区では地表にコンクリートやアスファルトが覆っていたが，直下に施工時の整地盛り土が存在する。

T.P.131.90m付近からは約20㎝の厚さで旧耕土層がみられ，３層がにぶい黄褐色砂混粘土層，灰黄褐色砂混粘土層（４層）が全体に堆積している。３層は鉄分の沈着が著しく色調が変わっているが，本来３・４層はほぼ同質の層であろうと思われる。３・４層からは土師器，須恵器，瓦器などの土器の小破片が出土した。

T.P.131.70m付近に見られる６層の黄褐色粘土層は，本調査区での遺構面基盤層に当たり，この層の上面で各時代の遺構が検出され，以下は無遺物層のようである。なおこの層は福瀬遺跡全体に及ぶわけではなく，当然全調査範囲の各地域では異なる層が遺構面と認識されている。小範囲の本調査区内においても，遺構面は砂礫の含み具合が多くなったりして礫層様に変化する部分があり，また北半では二酸化マンガンの沈着が激しく，黒褐色に変色するなど変化に富んでいた。

６層下では，灰黄褐色の礫層が普遍的に認められ，この付近の所謂地山を構成するものと考えられる。



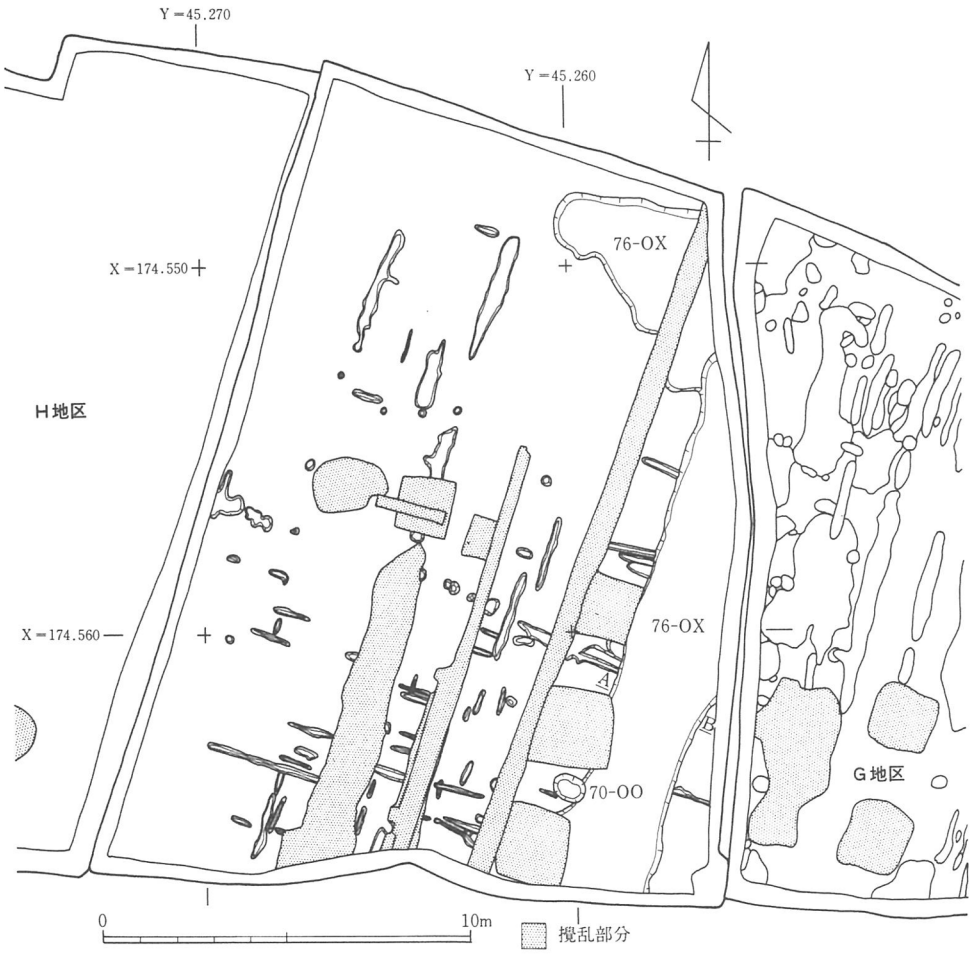
１．整地盛土
２．灰色砂混粘土
３．にぶい黄褐色砂混粘土。鉄分多く含む旧耕土
４．灰黄褐色砂混粘土。３層と同質で鉄分沈着少ない。
５．にぶい黄褐色礫混粘土。76-OX埋土
６．黄褐色粘土。一部礫混りとなったり黒変色部分あり。遺構面基盤層
７．灰黄褐色礫層。部分的に礫の混在量変化あり。

第４図　調査区南壁（一部）土層断面図

第2節　遺構と遺物（第5～8図，図版3～5）

本調査区で検出された遺構は，撹乱を除くすべての総量で約80である。大半が畑の遺構であるいわゆる鋤溝である。鋤溝にはほぼ南北方向のものと東西方向のものが存在し，中にはやや幅が広くなるものもあるが，いずれも5㎝程度の深さしか残っていない。ただ埋土が灰褐色のものと褐灰色の二者があり，二時期にわたる耕作の遺構であることがわかるが，方向や大きさと埋土の相関性はなく，具体的な耕作の復原はできない。

遺構として捉えられるものは，次に述べる土坑と落ち込みであり，他に小穴がいくつか見られるが，極めて浅い窪み状のもので建物を構成するようなことはない。



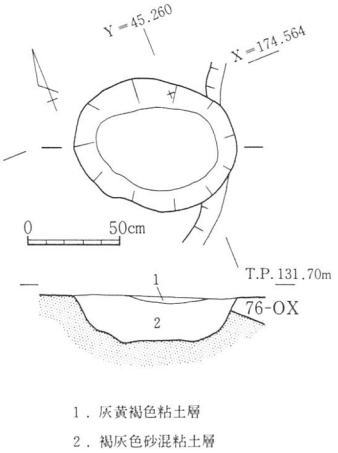
第5図　調査区平面図

70－ＯＯ（第６図，図版４）

長径90㎝，短径70㎝のやや長円形を呈する土坑であって，深さ25㎝を測る。東肩が76－ＯＸを切っているので新旧関係がわかる。

埋土は褐灰色砂混粘土層単層であり，上面の窪みに溜まるように薄く灰黄褐色粘土層が見られた。埋土の様子からすると機能を終えて一気に埋められたようであるが，性格は不明である。

遺物は，瓦器と土師器の細片が数点出土したのみであったが14世紀代のものであろう。



第６図　70－ＯＯ平面・断面図

76－ＯＸ（第７図，図版４）

調査区の東端に沿うように見られた広範囲かつ浅い落ち込みである。

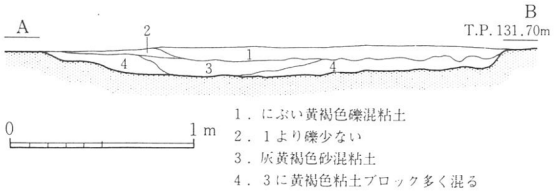
断面図作成（Ａ－Ｂ，第５図）付近では，平均2.5 ｍほどの幅を持ち，深さは15㎝程のものである。形状は溝状であるが，北へ延びた後やや西側へ不整形に広がる。ただ，広がるところで若干の段を持つので，本来は溝状の窪みと不整形の落ち込みが重なったものと考えられる。調査時にはこの状況が良く把握できなかったので，一連のものとして呼称し，遺物も分離していない。時期差の有無も不明である。

埋土は上から，にぶい黄褐色礫混粘土，灰黄褐色砂混粘土，さらに黄褐色の粘土ブロックが混入するものであり，調査区南壁付近のようににぶい黄褐色礫混粘土単層としか見えないところもある。

この落ち込みは，先の70－ＯＯに切られており，検出時にも上面にいくつか鋤溝が見られたので，最も古い遺構であると言える。

遺物はかなりの量が出土したが，ほとんど小破片で目立ったものはなく，遺構の性格も推定する材料を欠いている。水が流れたような痕跡はない。

前回調査区のＧ地区検出の遺構との関係も明瞭でなく，もともと浅いうえ撹乱が多く，検出方法によっては同じ条件で見出しにくいものなのであろう。



第７図　76－ＯＸ断面図

76－ＯＸ出土遺物（第８図，図版５）

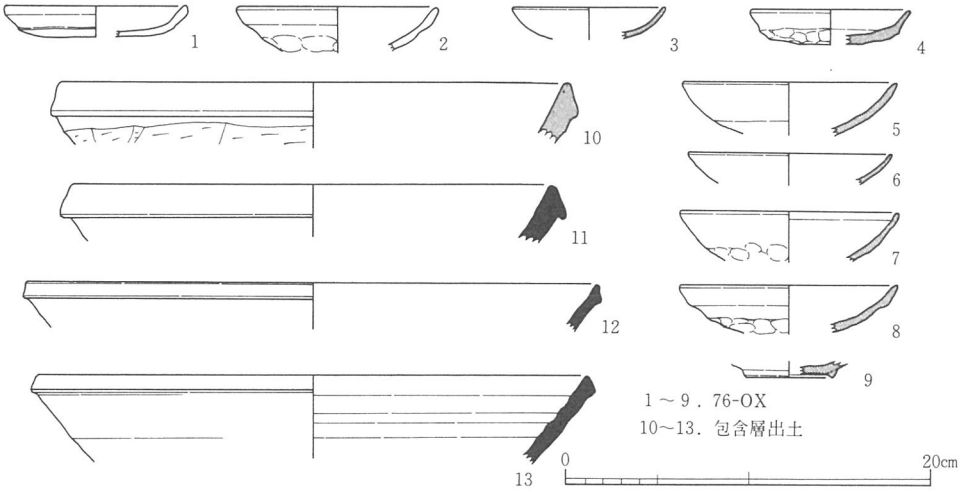
76－ＯＸからは土師器・瓦器・須恵器などの遺物が出土したが，ほとんどが細片で図示できるものは少ない。１・２は土師器で小皿と椀であるが，２は瓦器の焼成不良品かも知れない。４を除く３～９は瓦器椀であるが，いずれも口径が小さく，焼成不良で土師器様に見えるものが多い。体部下半のオサエが観察できないものもある。４は瓦器小皿であって焼成もよい。９の底部などもあり，高台が退化しきった時期ではない。14世紀中頃を中心とした時期が与えられる。

包含層出土遺物（第８図，図版５）

包含層からも多くの土器破片が出土し，縄文時代と思われるサヌカイト剝片から近世の陶磁器までが含まれるが，大半は中世の遺物であった。土釜や甕は少なく，瓦器椀・土師器椀片を中心に，瓦質の鉢や須恵質鉢がみられた。

実測に耐えうるものを選ぶと鉢ばかりになったが，11～13のうち10が瓦質の他は須恵質である。内面はいずれも小片のため観察できなかったが，10の外面はケズリである。口縁部は，11のようにシャープな作りで端面を垂下させるものや，さほど端部を意識させない作りのものが混在する。須恵質のものはいわゆる東播系の製品であるが，瓦質製品が混じり始める14世紀後半代の遺物である。

当調査区では良好な遺構が見られなかったが，以上のように14世紀代の遺物が中心であって，先の報告による「Ｖ期」と設定された本遺跡の時期に関連する地区である。



第８図　出土遺物実測図

第Ⅲ章　まとめ

福瀬遺跡の発掘調査は，本報告をもってひとまず終了した。本文でも触れたように今回の第４次調査で，既往の成果に大きく付け加えるべき新たな遺跡内容の検討材料は見出しえなかった。したがって，先の報告「福瀬遺跡」で述べられている諸問題に若干の私見を加えてまとめとしたい。

福瀬遺跡における開発の画期は鎌倉時代前期にあるとされ，開発の重点は荒廃耕地の再開発や山間の地に新たに求められ，それが中世開発史の研究成果と一致している。ところで，このような地の開発の歴史を考えるうえで，開発という営為が具体的には何を指しているかという点である。先の報告では基本的に，斜面の水田開発・潅漑用水などについて検討が加えられており，「水田」開発ということが前提となった考察がなされている。

福瀬遺跡のような山間部で，なおかつ地形改変の困難な地では，最初の開発の画期について「水田」を想定するほかに，畠地を付け加えるべきだと思われる。もちろん水田耕作が行なわれていたことは否定すべきではないが，中世初期の畠作農耕の発展という事実についても考慮する必要があるということである。特に福瀬遺跡のいわゆる鋤溝の残存状態を見てみると，畠の土地利用と考えても充分理解できるところである。一般に鋤溝と呼ばれる遺構がどのような事情で形成され，帰属時期は周囲の遺構との関連においてどう位置づけられるか，が今後の調査で注意を喚起されるところである。

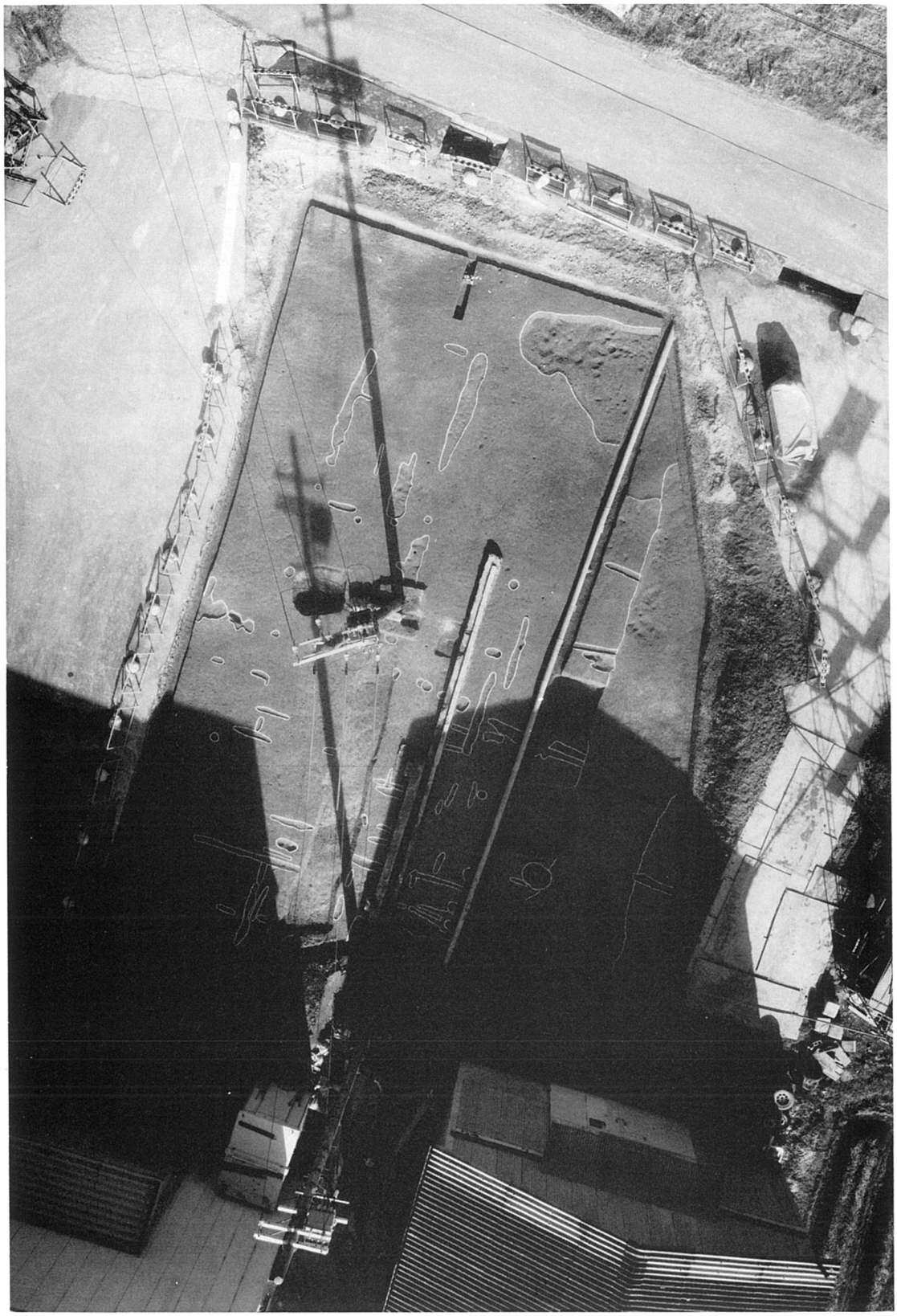
中世における農業史が稲作と田地の研究に圧迫されがちな状況にあって，実のところは畠地による各種農作物が中世農民の生産基盤の重要な比重を占めていたことは想像に難くない。この点は，発掘調査に伴う花粉分析などの成果が援用されるべきであるが，分析資料採取の方法など今後の問題意識的な調査課題となろう。

また，「居館」とされた堀立柱建物と鋤溝の畠地がどの程度並存させうるかが問題となるが，先の調査結果では「居館」周辺には鋤溝が認められない事実があって，建物と鋤溝遺構が共存するなら，周辺は建物の主の農場となっていた可能性がある。領主－農民の関係も考古学的な調査によって，次第に実態が究明されることが期待されよう。

（参考文献）黒田日出男『日本中世開発史の研究』歴史科学叢書 校倉書房 1984年。

なお，黒田日出男氏によれば，畑と畠は使い分ける必要があるという。

図　　版



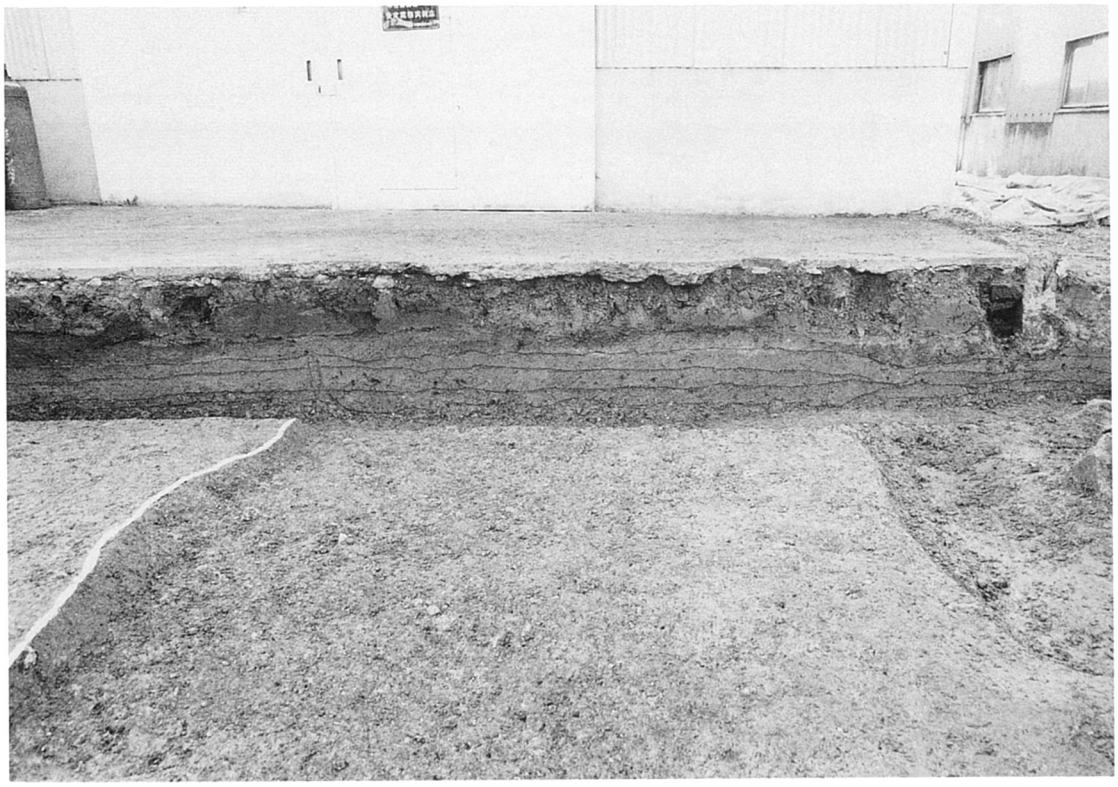
図版1　調査区垂直写真

図版2　調査区全景

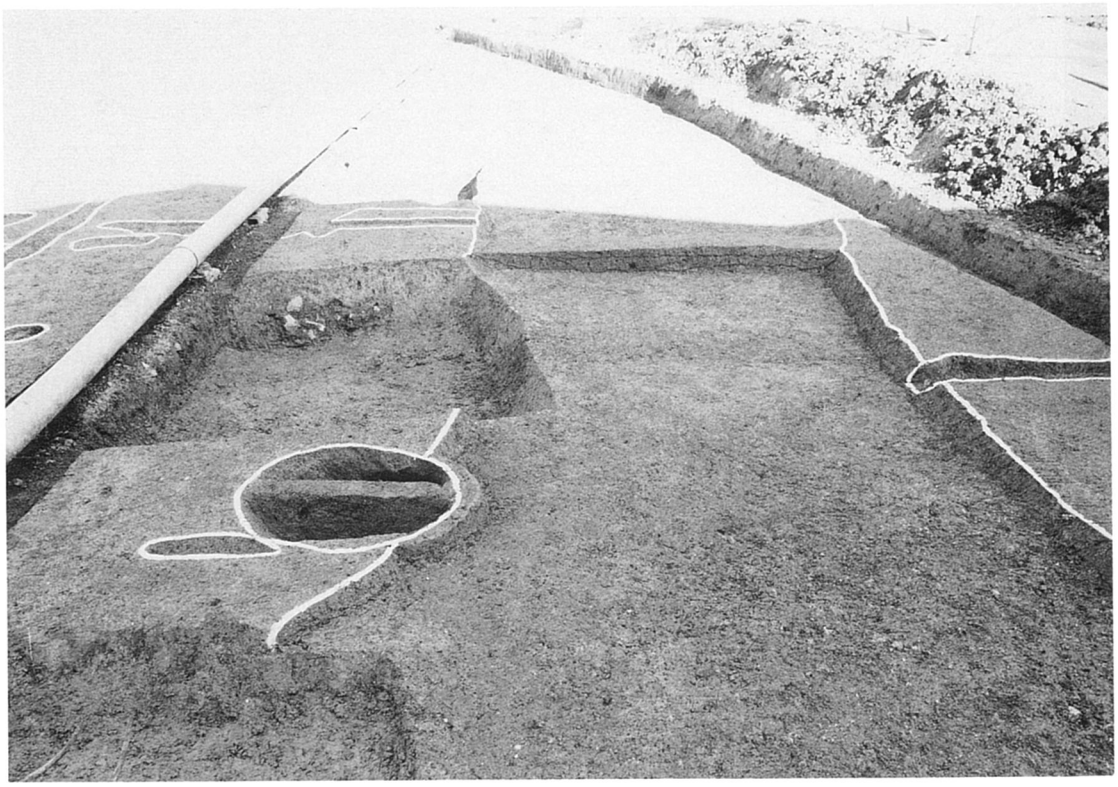
（西方上空から）

（東方から）

図版3　土層と遺構



調査区南壁断面（部分）

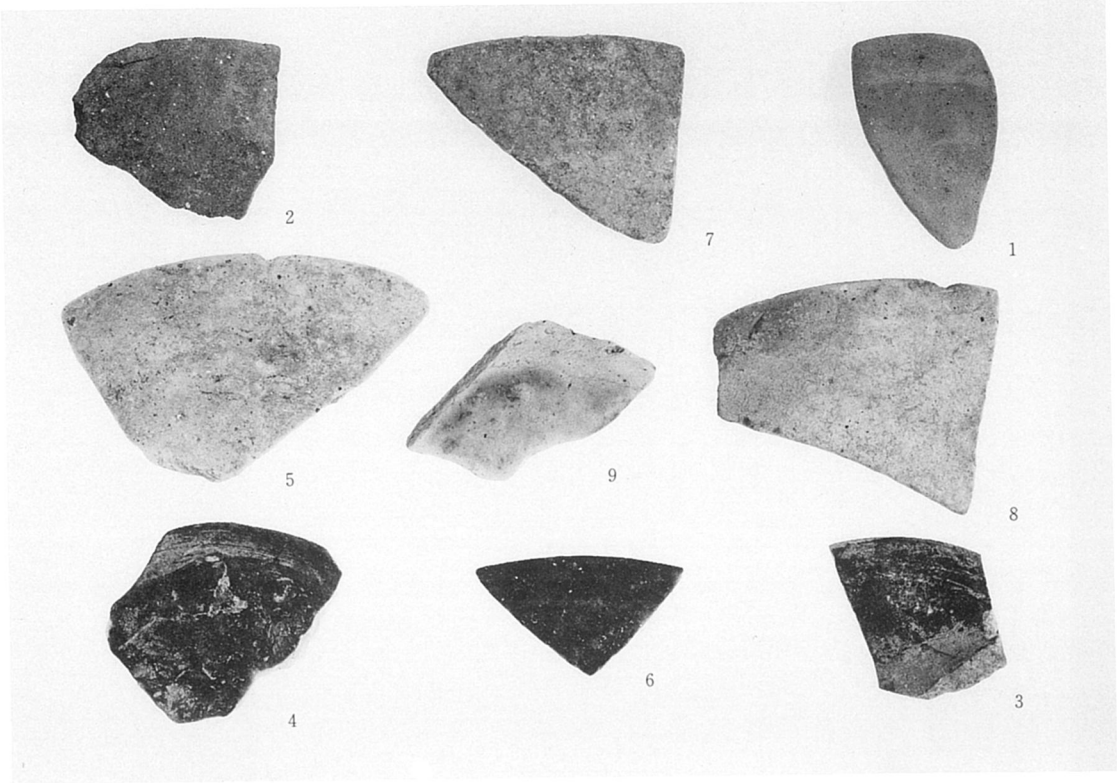


70－OOと76－OX付近（南から）

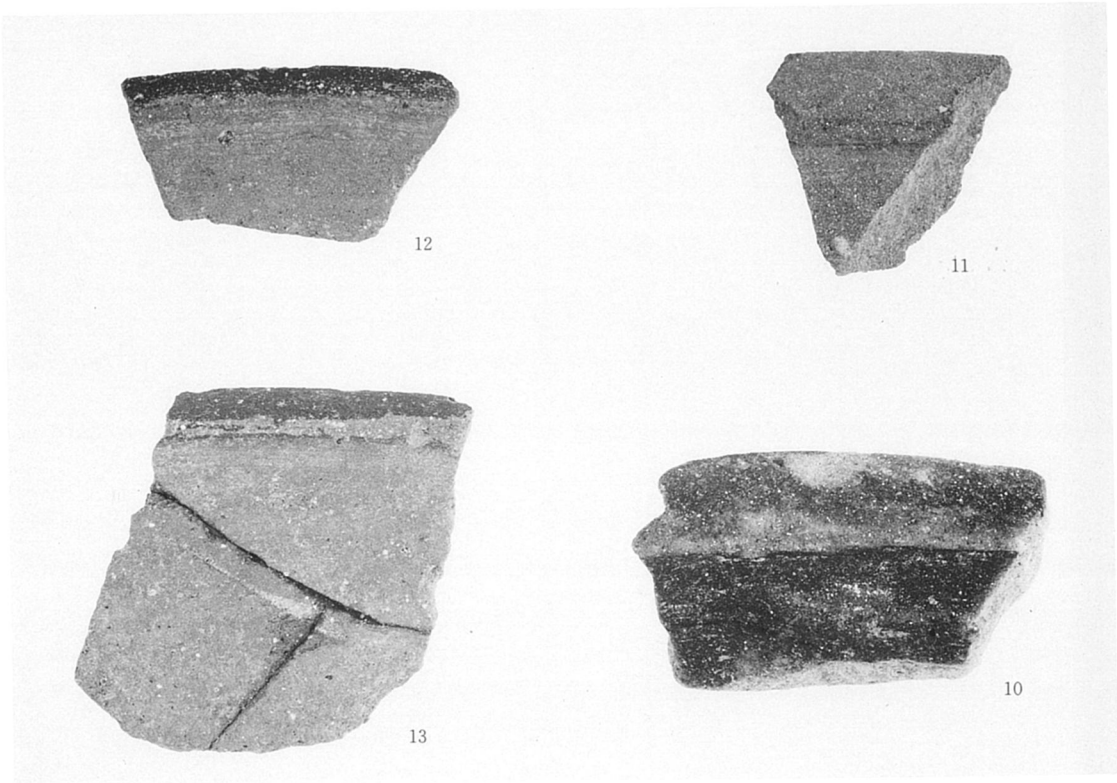
70－OO（南から）

76－OX断面（南から）

図版5　遺物



76－OX出土遺物



包含層出土遺物

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第49輯

福　瀬　遺　跡　II

主要地方道枚方・富田林・泉佐野線建設に伴う
発掘調査報告書

1990年3月31日

編集・発行　財団法人　大阪府埋蔵文化財協会
大阪市中央区谷町2丁目2－20大手前ウサミビル

印　　刷　株式会社　中島弘文堂印刷所